View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository



# 「小橋勝之助日誌」（四）―「天路歷程」

## 解説―「小橋勝之助日誌」（四）―「天路歷程」をめぐって

室田保夫[*1]・鎌谷かおる[*2]・片岡優子[*3]

### はじめに

ここで紹介する「小橋勝之助日誌」は大阪市淀川区にある社会福祉法人博愛社所蔵になるものである。博愛社の創設者小橋勝之助（一八六三～一八九三）は兵庫県赤穂の出身で神戸で医学を学んだ後、東京に行き、神田キリスト教会でウイリアムズ・C・Mから洗礼を受けたクリスチャンである。該日誌は表紙に「天路歷程」と墨筆で記されており、一八九二（明治二五）年二月二一日から同年一二月三〇日までのものである。サイズは縦二〇センチ、横一六センチで和綴八六丁からなっている。この日誌「天路歷程」については、さきに「小橋勝之助日誌（二）―『天路歷程』」（『関西学院大学社会学部紀要』第一〇五号）、「小橋勝之助日誌（三）―『天路歷程』」（『Human Welfare』第一巻第一号）として、二回にわたって紹介してきた。今回は前回の続きを翻刻するものである。小橋勝之助やこの日誌の背景等については前稿を参看していただきたい。

### 一、北海道への旅

さて、今回紹介する日誌は一八九二年七月一六日から九月一七日までの約二ヶ月間のものである。今回は前稿において途中までしか紹介出来なかった小橋の北海道視察旅行の全容が記されている。さしあたり、ここで北海道視察旅行の全行程を再度確認しておくことにしよう。

小橋は一八九二年六月三日、当時、連携関係にあった岡山孤児院の石井十次と面談し、翌四日、神戸に向かい北海道に向けて出立の途に就くことになる。神戸から大阪へ行き、一一日に京都に着す。そして一五日に大垣、その後名古屋へ行き、震災孤児院を訪問し、二二日に東京に着している。東京では多くのキリスト者や社会事業家に会っていることは、前稿と今回の翻刻箇所から理解できよう。

東京に約一ヶ月滞在し、七月二五日に上野駅から仙台に向けて出発する。その夜に仙台に到着し、直ちに仙台孤児院を訪問している。そして二八日に仙台を立ち、青森を経て二九日に函館に到着する。二日後の三一日、船にて室蘭に着し、林竹太郎の経営する北海孤児院に寄寓する。その後、小橋は林宅を拠点にして、札幌や岩見沢付近を旅し、多くの人に出会うのである。この北海道での生活が約一ヶ月間続き、九月六日に林らに別れを告げ帰路に就く。翌日函館に着し、九日に東京に戻り、東京にて再び多くの人に会い、一五日に東京を経ち、名古

屋に寄り、九月一七日に博愛社に帰り、この旅は終わる。しかし病気を押しての長期旅行の疲労も重なり、彼は翌年の三月、三〇歳の若さで天に召されることとなる。病身でありながら命を賭した旅の内実について、これまでほとんど知られておらず、この視察旅行はきわめて重要な意味をもっていたことはいうまでもない。それへの詳細な考察は後稿に譲るとして、今回（前稿も含め）紹介する日記の内容について若干見ておきたい。

## 二、日記の内容をめぐって

第一としてこの旅において、大阪、京都、名古屋、仙台、とりわけ東京と北海道において約一ヶ月という長期の滞在を読み取ることができ、その間、社会事業施設、学校やキリスト教会視察、そしてキリスト者や慈善事業家ら多くの人と出会っていることも注目しておく必要がある。東京での長期滞在は、北海道視察が第一義の目的とはいえ、以前に青春時代を過ごし、その旧交を温めるということ、そして当時の有力な人物との接触を目的としていたことが推察される。東京に於いて往路と復路においてそれを窺うことができる。明治女学校や明治学院、立教女学校等の学校関係、そして番町教会といった東京のキリスト教会への訪問等がある。またキリスト者の植村正久、井深梶之助、横井時雄、田村直臣、原田助らといった人物と面談したことが記されている。さらに女学雑誌関係においては巌本善治、川合信水、暁星園の本郷定次郎、孤女学院の大須賀亮一らとも会っている。とりわけ林ウタ（歌子）との再会は、例えば七月二十一日の段に「夜は明治女学校に行き巌本善治兄と林ウタ愛姉と三人にて孤児院の将来博愛社の将来に付き談話せり又余の旅費に付き巌本兄に話せり林ウタ愛姉の決心も主の御恵みによりて益々堅くなる事を得主に感謝せり」と記されているように、天恩への感謝の思いを認めている。周知のように、林は教師職を擲ち八月末に博愛社に奉職することになる。

北海道では最重要課題は北海孤児院の林竹太郎との出会いである。これについては前稿でも記したが、博愛社との合併や後述するように今後の児童養護の課題について日々、議論することになる。ちなみに小橋の訪問した林竹太郎の北海孤児院は、一八九〇（明治二三）年一二月に「北海孤児院設立趣意書及規則」（『子どもの人権問題資料集成』第二巻、二〇〇九、四五―五五頁）を出し、江湖にその趣旨を披瀝している。それによれば第一条に「基督一致教会ハ北海道ニ於テ一ノ孤児院ヲ設立シ本邦無告ノ孤児ヲ育養シ北海孤児院ト称ス」とあり、「位置」は「北海道胆振国虻田郡虻田村字ニナルカ」となっている。広大な土地を払い下げを受け、開設される計画が記されており、開設草創期での林との邂逅であり、議論であった。

また、この北海道においては時を同じくして渡道していた海老名弾正に偶然出会ったり、大島正健や竹内種太郎との出会いもあった。そして幌内炭山を視察し大島正健宅において、当時空知集治監の教誨師であった留岡幸助にも出会っている。八月二四日の日誌には留岡と邂逅し「監獄の事と出獄人保護の事札幌教会創立の事等を聞き大に益を得たり」とある。このように北海道においても多くのキリスト者に会い、また北海道についての情報を可能なかぎり得ようと努力していることが読み取れる。

第二として、この旅から当時の彼の博愛社の構想、とりわけ彼の児童養護施設に対する取り組みについて窺うことが出来る。例えば八月一日の日記には、北海孤児院主任林竹太郎と以下のことについて話したことが認められている。これは当時の彼の児童養護に関する考え方を知る貴重なものでもある。

（一）如何にして孤児に実業を授け社会に出す可き乎（農業的殖

民を以て其基礎を定むる事）（二）孤児院事業と社会改良伝道教育及其他の基督教主義の事業と並行して進歩すべき真理ある事（三）農業教育は孤児を教養するに適当の道なり（四）孤児院の独立問題（孤児院は天下有志の義捐金に由て維持をすべきものにして独立すべきものにあらず）（五）孤児の成長したるものに完全なる実業教育を施し之を殖民して独立せしむる事は目下の急務なる事（六）以上第五の目的を達する為に一の仲間を組織せざる可らず博愛社之が任に当る可し（七）孤児院の為に働く役者につきての処置（八）孤児を他の実業に熱心なるクリスチアン青年の人と共に混淆して殖民する事（九）全国孤児院の一致同盟又孤児院主任者又役者の一致の信仰（十）日本百年の大計画

そして、三日には「（一）開拓事業と孤児院事業とは二つなる事二兎を逐ふものは一頭を得ず（二）北海道尤も緊要の地に本部を置く事（三）樹林地を開拓する事は未だ労働に不熟練なる年長孤児及びクリスチアン青年の人は耐へざる事（四）北海道に於て先づ少くとも十年の間静かに基礎を築く事を務めざる可らす等の問題に就き研究せり」とある。こうした点から小橋の北海道移住に対する期待とともに時期尚早との慎重な姿勢を読み取ることが出来る。それは博愛社の北海道への移住、それが北海孤児院との合併の問題と連動していくことの可否を問うといったこの旅の最大課題であった。

ちなみにこの旅は既刊の博愛社関係の著には「漫遊の所感」として「この行、氏は幾多研究調査の結果、移住殖民を企るには、信仰堅固、実業経済の道に練達したる不屈不撓の労働者なきときは、徒に時間金銭物品を空費し其成績覚束なかるべし。されば本社が今直ちに北海道へ移転せんことは、策の得たるものに非ず。宜しく却つて内地の実業盛なる大阪付近の地に移し、実業的教育を施し有為の人物を養成し、他日徐ろに移住拓殖のことに当らしむるべきなり。即ち博愛社は此の方針を以て熱心にその事業を遂行すべしと」（小橋実之助編『博愛社』、一九〇二、一〇頁）云々とある。ともあれこの旅が勝之助の身体をますます衰弱せしめ、ひいては博愛社の大阪移転という方針を決定せしめた重要な要因であったこと等を考えれば博愛社にとって大きな転換点であったことは言うまでもない。

＊1　関西学院大学人間福祉学部教授
＊2　関西学院大学文学部非常勤講師
＊3　関西学院大学社会学部非常勤講師

〔凡例〕

・原則として常用漢字を用い、固有名詞・地名は原文の文字をそのまま引用した。
・史料上の句読点は、原本の日誌の記述をそのまま引用した。
・判読不能な文字は、□で示した。また、文字数が判明できない場合は［　］で示した。
・原本中で、文字に疑問は無いが意味の通じ難いものについては（ママ）を附し、疑問の残る場合は（カ）を附して傍注した。

※この研究は、文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（C）課題番号19530538研究課題「大阪『博愛社』の総合的研究―大都市における児童保護の歴史的検証―」の成果の一部である。
※本稿の解説は室田、解読は室田、鎌谷、片岡がおこなった。

十六日（土曜日）今日は腸胃調はず午前は坂本泰蔵君来談せらる種々実業上の将来に付き談話せり同君も北海移住の志しあり午后は小野田鎮兄来談せらる同氏将来の方針に付き談話せり又同氏是れ迚従事せられし商業界の経験を話さる夜は早くより褥に就く

十七日（日曜）今日は腸胃尚調はず午前より午后へかけて休めり何の業をもなす事能はざりし只静かに心を養へり午后は志津鈴木の両氏と将来の方針につき談話し又川合信水君と信仰上の談話をなし夜は呉くみ子畔柳てい子廣瀬つね子の三姉に孤児教育及信仰上の談話をなせり

十八日（月曜）今日は腸胃尚調はず午前中は書見をなして休めり午后も亦同様に徒然に暮らせり夜は少しく散歩せり今日は北海孤児院林竹太郎氏への書翰小澤きく愛姉への端書を認め差出せり

十九日（火曜）今日は午前は入浴し且つ事務を取り十一時頃より築地に行く午后六時頃迄休息し其より帰社し明治女学校卒業式祝会に臨みし大に愉快を感じたりき今日は名古屋伊藤延吉氏青山英和学校高城牛五郎氏王子村大須賀亮一兄より書翰到着せり

二十日（水曜）今日は午前八時頃起褥其より準備をなし十時頃より築地小沢氏の宅に行き病気摂養午后は林ウタ愛姉来談せらる将来の働き上キリストの十字架勤労は即ち救ひと云ふ事に付き話せり同情同感を表せらる夜は名出いく愛姉を訪ねキリストの十字架勤労は即ち救ひと云ふ事に付き話せり又名出いく愛姉に余が農事を働く風を画く事を托せり

二十一日（木曜日）午前六時頃起きて喫飯をなし休息し居る時に小橋礼太郎氏よりの書翰来れり之に由て岡山孤児院の模様概略を知るを得たり又藤井米八郎氏よりの端書到着せり　今日の国民新聞に我国明治廿四年十二月文部省専門学務局の調査による技藝学校数次の如し

| | 公立 | 私立 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 商業学校 | 一三 | 七 | 二〇 |
| 農業学校 | 一三 | 八 | 二一 |
| 工業学校 | 一 | 四 | 五 |
| 美術学校 | 一 | 七 | 八 |
| 手藝学校 | ― | 六 | 六 |
| 唱歌学校 | ― | 四 | 四 |
| 測量学校 | ― | 一 | 一 |
| 航海学校 | ― | 一 | 一 |
| 合計 | 二八 | 三八 | 六六 |

午前より午后へかけて休眠せり女学雑誌基督教新聞を読みて益を得たり夜は明治女学校に行き巌本善治兄と林ウタ愛姉と三人にて孤児院の将来博愛社の将来に付き談話せり又余の旅費に付き巌本兄に話せり林ウタ愛姉の決心も主の御恵みによりて益々堅くなる事を得主に感謝せり一昨日より今日に至るまで小澤きく愛姉及び其弟妹の一方ならぬ介抱を受けて身体大に恢復せり深く主に感謝す

二十二日（金曜日）今日午前は身体何となく疲労して休めり午后明治女学校高等科卒業生竹内うめ愛姉にトルストイ伯の労働の書を訳読して貰ひ之を聴けり実に感ずる事多かりし晩に及んで高城牛五郎氏竹友安次郎氏来談せらる夜は又竹内うめ愛姉に労働の書を訳読して貰ひ之を聴けり今日は腸胃殆んど全快せり

二十三日（土曜日）午前は準備をなし人力車を雇ひ有志者を訪問し午后六時半帰社せり今日は多田素君松村介石君浦本弘君、杉山重義君、近藤東之助君（旧感化院係員当時活版）橘幸子姉高阪昌寿氏三浦泰蔵氏を訪ねし夜は築地に行き小澤氏一家族に別を告げ名出いく姉同保太郎君に別を告げ帰社其より女学雑誌社一同と親和会

を開けり午后十一時より午前二時頃迄藤井兄と談話せり

二十四日（日曜）午前八時頃迄就褥林ウタ愛姉来訪され博愛社に関する事務を委托せり午后は川合信水兄にキリストの十字架及労働につき話せり又湯谷瑳一郎兄多田素兄来談せらる浦木弘氏も来談せらる夜は呉くみ姉宅にて竹内むめ子姉より例の書物を聞けり今日廣井久杉原花両姉よりの書翰着せり又犬養銈之助君よりの書翰を得たり夜午前二時迄に杉原花廣井久両姉への端書大須賀亮一氏犬養銈之助君二氏への書翰博愛社への書翰（第十七報）を認めたり

二十五日（月曜）午前四時半頃より人力車を雇ひて上野停車場に行く女学雑誌社川合信水君上野迄見送られ又湯谷瑳一郎君も見送られ出発迄種々荷物のことなど周整せられ大に助けを得たり昨夜不眠の為汽車中にては多分は睡眠せり仙台に着せしは午后七時頃なりし直に人力車を雇ふて東六番町仙台孤児園に到る夜は二人の兄弟と暫らく談話し九時頃褥に就けり　本日の日本と云ふ新聞にて見しに北海道札幌強風　四国岡山強風雨　播州市川加古川出水

人ノ食物
- 穀物類
- 乳肉卵 ── 動物性
- 蔬菜類
- 果実類
- 植物性
- 水、空気
- 労働

二十六日（火曜日）本日午前五時起褥其より聖書祈祷喫飯又朝の集りに於て孤児等に労働の必要を語れり其より佐藤稠松君の案内により組合教会講義所に行き其より松宮はる女史を訪ねしも不在其より仙台美以教会牧師平岡駒次郎氏を訪ね孤児院の将来及労働につき談話せり其より佐藤信孝君を訪ね農業上の談話をなし其より帰路に就き押川方義君を訪ね明日午前来談する事を約せり十二時帰宿五時頃迄休眠晩餐を喫せし後入浴夜は早くより就褥　今日は凡そ二里程の道を歩行せり幾分か疲労せしも身体の為には甚だ益なりし　今日又トルストイ伯の飲酒喫煙論を読みて大に益を得たりトルストイ伯論じて曰く人の飲酒喫飯に恥るは良心の働き即光を暗ます外なき事を切に論ぜり余は十年来胃病を患ひ食物其度を失し良心の光りを暗ませし事実に大なり主よ願くは余の罪を赦し食事を規律正しくなさしめ玉へアーメン

二十七日（水曜）今日は午前五時起褥聖書祈祷喫飯孤児園の集りに於て勧めをなし其より押川方義君を訪ね日本の前途に横はる問題に付き意見を聞き大に愉快を感ぜり十一時過ぎより人力車を雇ひ仙台市中を巡り観察せり午后は松田順平君竹内平八君の二氏に孤児院現世の模様及び将来の方針に付き話せり又松宮はる女史来訪せらるキリストの十字架及労働に付き話せり夜は早くより就褥す

東北地方に於て事をなさんと欲せば先づ仙台を堅めざる可らず

二十八日（木曜）今日は午前一時頃起褥準備をなし一時半仙台孤児園を辞し仙台停車場に行く二時四十分発車せり午前中は車中にて睡眠せり今日は雨天にて鬱陶しかりし午后は車中より東北の広漠たる原野を眺め幾多の感じを抱きつゝ午后四時青森に着す中島屋に投宿す其より暫時休息博愛社への書翰（第十八報）を認め差出せり入浴喫飯をなし午后九時函館行の汽船に乗込めり其時に実に神の前に恥づべきこと出来たり即ち昨夜仙台孤児園に於て或る青年の好意により第四回夏季学校生徒乗船の証（二割引）二葉を貰ひし余も深く考ふる事もなく之を受取り青森に於て之を使用し賃金壱円の処二割引にて八十銭にて乗船せり然るに船中の或る青年余の夏季学校生徒たるを聞き来りて尤も懇ろに夏季学校の模様を聞く余は素より夏季学校の生徒に非らず又函館にも行きし事なければ何事も話す能はず其時の胸中痛しさ云はん方なし是れ全く偽り

の行為に偏りたれば也主よ願くば余の罪を赦し再たび斯る過ちに陥らしめ玉ふ勿れアーメン　本日汽車中にて国民新聞を借覧し赤穂郡千種川大洪水にて人畜死傷無数との電報を掲載しありし

二十九日（金曜日）午前四時頃函館に着す東濱町二十三番地㊤上岡七郎兵衛方に投宿午前中は昨日の疲れにて就褥午后は齊藤壬生雄氏を訪ねしも不在其より帰宿暫時休息せしに齊藤壬生雄氏来訪せられ種々孤児院の将来労働問題北海問題に付き話せり夜は函館キリスト教会有志祈祷会に列しキリストの十字架及び勤労に付き話せり十時褥に就く

三十日（土曜日）今日七時頃起褥喫飯入浴其より書見をなし川合信水氏宛の端書松田順平氏竹内平八氏両氏宛の端書小沢きく小沢縫殿助宛の端書湊謙一氏への端書を認めたり午后は増田大吉君来訪され種々談話せり五時根室丸に乗込み午后十時頃室蘭へ向つて出発

三十一日（日曜）今日午前十時頃室蘭の港に着し十一時過東紋縄村に到着北海孤児院より林兄をはじめ四五の兄弟迎ひに来らる北海孤児院に着せしは十二時なりし昼は馬鈴薯の饗応に預り午后は種々事業上信仰上の談話をなし又暫時散歩晩餐を喫し夜は林愛兄と植民上の談話をなせし又合同に付き種々の問題を談話せり

八月一日（月曜）今日午前中は前月中の会計を計算し震災孤児院への端書巌本善治兄への端書孤女学院大須賀兄藤井兄への端書石井十次兄への端書博愛社への端書（第十九報）を認めたり又博愛社前途の方針に付き考へたり午后は北海孤児院主任林竹太郎氏と次ぎの個條に就き話せり（一）如何にして孤児に実業を授け社会に出す可き乎（農業的殖民を以て其基礎を定むる事）（二）孤児院事業と社会改良伝道教育及其他の基督教主義の事業と並行して進歩すべき真理ある事（三）農業教育は孤児を教養するに適当の道なり（四）孤児院の独立問題（孤児院は天下有志の義捐金に由て維持すべきものにして独立すべきものにあらず）（五）孤児の成長したるものに完全なる実業教育を施し之を殖民して独立せしむる事は目下の急務なる事（六）以上第五の目的を達する為に一の仲間を組織せざる可らず博愛社之が任に当る可し（七）孤児院の為に働く役者につきての処置（八）孤児を他の実業に熱心なるクリスチアン青年の人と共に混淆して殖民する事（九）全国孤児院の一致同盟及孤児院主任者及役者の一致の信仰（十）日本百年の大計画午后四時頃より主にある兄弟斉藤兄の宅に林兄同伴にて行き晩餐の饗応に預かりたり夜は福音新報を読み魯国の愛する兄弟トルストイ伯ベギツトセブカといへる処にて飢饉に悩る農民の救助中重病に罹られしことを知り大に憂へたり願くは主よ彼を癒し玉へアーメン又故郷なる矢野村及赤穂郡全体大洪水なりし報知を得たり願くは主よ之に由て彼地の人民に道徳の何者たる事を知らしめ実業に勤勉力行する善良の精神を与へ玉へアーメン

八月二日（火曜）本日午前は林竹太郎兄と博愛社北海孤児院合同の件に付き大に談ずる処ありし又自らの信仰に就きても反省する所ありし午后は新聞雑誌を読み内閣の大騒動と北海道室蘭と札幌との鉄道の開通愛岐震災自助会の報告等も知りし夜は早くより就褥

三日（水曜日）本日午前は聖書祈祷喫飯林竹太郎愛兄と（一）開拓事業と孤児院事業とは二つなる事二兎を逐ふものは一頭を得ず（二）北海道尤も緊要の地に本部を置く事（三）樹林地を開拓する事は未だ労働に不熟練なる年長孤児及びクリスチアン青年の人に耐へざる事（四）北海道に於て先づ少くとも十年の間静かに基礎を築く事を務めざる可らず等の問題に就き研究せり又赤穂寺田直太郎氏沢田寸二氏両氏への端書博愛社一同への端書水守立節氏への端書小橋春岱氏への端書を認めたり午后は専ら身体の運動新鮮の空気呼吸をなせり又今日の新聞にて千葉県徳島県山梨県岡山県等に

大洪水ありしよし報ぜり丹羽寛吾君の報知にて岡山県尤も甚しかりしも岡山孤児院は無事なりしを知りたり又村木孝英君齋藤鉄三郎君来訪せられ紋鼈地方開墾の由来を話さる大に益を得たり夜は早くより就褥

四日（木曜日）今日は午前七時起褥朝運動聖書祈祷小山田虔君中澤正君来訪せられ種々談話せり次に林竹太郎君と北海孤児院の将来博愛社の将来の方針に付き話せり「天ノ時、地ノ利、人ノ和」博愛社が将来取る所の主義を漏れなく話せり午后は馬に乗りて運動し身体大に疲労せしも大に益を得たり晩景に及び赤穂郡赤松村ノ産高谷義行氏来訪せられ全国水害に就き談話せり夜は早くより褥に就く

五日（金曜日）今日は午前七時褥を出で朝運動聖書祈祷喫飯齊藤良知氏の来訪あり其より林竹太郎兄と北海孤児院将来の方針に付き談話せり午后は身体疲労を覚へ夜は早くより褥に就く今日東京阪本泰蔵氏より書翰を送らる

六日（土曜日）今日は午前七時起褥朝運動聖書、祈祷、喫飯其より林竹太郎兄と人の智恵と神の智恵との別キリストの十字架に付き互ひに話せり其より大阪阿波松之助君、姫路基督教会、神戸小林茂兵衛、松田次郎吉、東京阪本泰蔵君、巌本善治君への端書を認めし午后は馬にて運動をなし夜は早くより就褥

七日（日曜日）今日は午前七時起褥朝の仕事を終へ九時半より紋鼈教会に集まり真正の平安と喜楽につき説教せり其より休息所に於て暫時休息し帰宅昼飯を喫し精神と肉体を休め又博愛社よりの水害の報知来れり実に意外の事なりし夜は函館新聞を読み大に益を得たり又今日林竹太郎兄と共に主任者の心得に付き互ひに話せり

八日（月曜日）午前六時起褥聖書祈祷喫飯其より博愛社への書翰（第二十報）を認め又北海孤児院の方針博愛社の方針水害等に付き考へたり午后は腹部何となく不快暫らく休み夜は早くより就褥今日蚯田郡蚯田村高谷善行氏よりの書翰来着せり余の一身には病苦と博愛社の困難と同胞の水害に罹りし事と岡山孤児院震災孤児院の前途と石井十次兄の心霊上の進歩及同兄に付添ふ役者の心霊上の進歩及明治女学校女学雑誌社孤女学院の平安進歩と暁星園愛岐震災自助会仙台孤児園の独立進歩と北海孤児院の独立進歩との考へと祈りに充満し実に耐へ難き思ひなり主よ願くは霊肉力を与へ是の困難なる境遇に勝たしめ玉へアーメン

九日（火曜日）午前七時起褥聖書祈祷喫飯其より滋養物調理をなせし又書見をなせし午后は暫らく書見且休眠し晩に至りて入浴し喫飯其より夜に至りて談話をなし新聞を読み楽めり札幌共進会の建物は三舘をもって成り第一舘を四部に分ち農作物、鉱物、木材、金属、農具等を陳列せり第二舘は水産及水産に関する器具等を陳列せり第三舘は右府県の参考品等なり其他付属には器械舘家禽舎羊豚舎牛馬舎審査室事務所土人小屋水属室養魚池の設けあり又協賛会の設置されたる仮アイヌ村あり（函館新聞に見ゆ）毎日次ぎの三個條を熱心に祈りつゝ実行せざる可らず（一）キリストの愛に充さるゝ事羅馬書十二章哥林多前書十三章約壱、三ノ一―二十四、同、四ノ七―十二（二）肉体の病気の癒さるゝ事（三）北海道の事情に通ずる事

十日（水曜日）午前七時起褥聖書祈祷喫飯書見をなし又海辺にて運動をなせり午后は齊藤鉄三郎氏来談せらる同氏より葡萄汁一瓶と林檎三十個余を贈らる晩に身体運動入浴夜は写真師来談せらる今日藤井米八郎氏よりの書翰到着

十一日（木曜日）今日午前七時起褥聖書祈祷喫飯其より書見をなし十一時頃より海辺に運動に出掛けたり海水浴をなせり午后は村木氏来談せらる其より暫時休眠震災孤児院丹羽寛夫氏より端書到着

又明年米国シカゴ府に於て開かるゝ開歳世界博覧会の趣旨次ぎの如し（一）各国民の言語文章家政宗教学術技芸及び人文組織を統一するの基礎（二）当代に於る経済工業及財政上の諸問題（三）教育制度其進歩及び欠点竝に智識全般の近世の非常なる進歩に適合すべき最良手段（四）文明国間商業上に用ゆべき普通言語を定むる事（五）万国版権智識上及び商業上諸法律（六）移住竝びに帰化法及同盟国政府及び其臣民の特権（七）貧困瘋癲及罪科を防遏減却し万国の生産力隆盛及徳義を増進するの有効なるべき手段（八）万国公法を以て一致の証明とし人類相互保護の一手段となすこと并に全世界を通じて一層其発達効力を増進する方法（九）交際列国の最高法として裁判の主義確定及列国争論を決するに方り戦争に代ゆるに仲裁法を以てすること夜は暫らく書見をなし午后十時就褥

十二日（金曜日）今日は午前七時起褥聖書祈祷喫飯暫時書見をなし又林竹太郎兄と信仰上の談話をなしたり午后は齋藤良知兄伊藤某氏北海孤児院地所の事に付き来らる種々談話を承はれり今日は大に運動を怠りたり夜は九時過褥に就く今日林ウタ愛姉よりの書翰来着せり

十三日（土曜日）今日は午前七時起褥喫飯暫時北海問題に就き研究其より二時間程運動喫飯後暫時書見休眠三時頃より暫時運動其より昇汞浴の準備をなし自らも入浴せり夜は小児等に幸福なる水夫の話をなしたり九時褥に就く今日博愛社よりの書翰岡山石井十次氏よりの端書到着せり

十四日（日曜）午前七時起褥聖書祈祷喫飯暫時心の準備をなし九時頃より紋鼈教会に集まりキリストの十字架につき話せり午后は休眠せり又巌本善治氏村尾得之氏よりの端書到着せり又函館新聞を読みたり夜はトムとボブ、ジョンスとの話しをなせり又林ウタ愛姉巌本善治愛姉小澤きく愛姉への端書を認めたり

十五日（月曜）今日午前は七時に起褥聖書祈祷喫飯其より北海道問題を研究せり今日は胃部不快を感じ食気なし午后は休眠せしも咳嗽咯痰ありて十分に休まれず晩には葛湯を飲みて断食せし大に胃部の停滞消散せり大に気分宜し夜福音新報函館新聞を読みし又孤児等には小女が愛らしき言ばを以て懲役人を救ひし話しをなしたり又筑後柳河より廣井きゆう杉原はなの両姉よりの書翰来着せり。今夜鈴木はる姉の悔改の為に祈れり

十六日（火曜）昨夜は咳嗽咯痰甚しくして終夜眠る能はず是れ胃部を害せしによるならん午前七時起褥聖書祈祷喫飯其より将に休眠せんとせし時に齋藤鉄三郎氏来訪せられ種々午后四時に至るまで談話せり同氏林檎を贈らる夜は書見をなし又沈思黙考せり

十七日（水曜）昨夜は咳嗽咯痰甚しくして終夜眠る能はず少しく喀血せし午前七時起褥聖書祈祷喫飯其より暫時書見をなし昨夜の疲労の為久しく休眠せし午后小山田虔君の来訪あり種々なる有益なる談話を聞きし晩にはトルビーの話しを孤児等になせり夜は林兄と種々感話せり今日水守立節氏よりの書翰到着せり

十八日（木曜）昨夜は老莫水を飲みて眠りに就きしに大に安眠するを得し午前七時起褥午前中は齋藤鉄三郎氏も来られ開墾の事につき談話せり午后は鈴木氏将来の方針につき又村上氏帰国の事に付き協議せり夜は明日札幌へ向つて出発するの準備をなせり今日沢田寸二氏より書翰来着せり

十九日（金曜日）昨夜は老莫水を飲みて眠りに就きし故大に安眠するを得し午前六時起褥祈祷喫飯齋藤良知君の一家族の来らるゝ事を待つ事久し十時に至りて来らる其より共に馬車（北海道の荷馬車を以て代用したるものなり）に乗りて発途せり馬車の動揺甚しくして腸胃を反転さする心地せり途中千舞鼈村を経て一つ

の坂を超へ元室蘭に着して暫時休息是時林檎菓子を食せしに腹痛を起せし其より再たび馬車に乗り海辺を廻り行きチリベツ屯田兵の有様を車上より眺め午后四時鷲別に着し齋藤氏知己の宅に休息し又喫飯せし元室蘭より鷲別迠の通路実に険悪馬車の動揺実に甚しかりし午后六時鷲別を発し同八時頃幌別に着し○仙旅籠屋に投宿夜は芥川清五郎君来訪され種々談話せり十時褥に就く

二十日（土曜日）昨夜は老莫水を飲みて眠りに就きし故大に安眠せり午前五時半起褥聖書祈祷喫飯八時に旅宿を出で八時五十三分発の汽車に乗り込めり汽車中に於て海老名弾正氏高橋熊太郎氏に邂逅せり汽車中より途中の山林原野海辺を眺め大に愉快を感じ且つ益を得たり又処々開墾着手の地所を観大に益を得たり江別より仙台の人田中兎毛氏宣教師コルテス氏も同車せられたり午后四時札幌に着し北原楼に投宿夜は少しく散歩し早くより褥に就く

二十一日（日曜日）本日午前人力車を雇ひ札幌市中を巡視せり午后は北原楼を辞し鈴木市五郎方へ転宿せり五時頃迠休眠せり明日幌内炭山歌臼内炭山巡遊の案内を協賛会よりうけたり夜は札幌教会に集まり海老名弾正氏の義人は信仰によりて生きると云ふ事に付きての説教を聞き大に益を得たり又聖晩餐を守りし今日は伝道師竹内種太郎氏に始めて面会せし又農学士大島正健氏に始めて面会せし

二十二日（月曜日）昨夜は老莫水を飲みて休みし故大に安眠したり今朝午前四時起褥協賛会の招きに応ずる為雨天を犯して五時三十分迠に札幌停車場に至る暫らくにして多くの人集まる即ち別仕立汽車に乗り込めり先づ歌臼内炭山に行き之を観昼飯を喫し其より岩見澤迠帰り又幌内炭山に行き之を観晩餐を喫し其より一直線に札幌に帰れり午后九時卅分札幌停車場に着し一同拍手万歳と呼びて散会せり今日は陸軍楽隊を雇ふて恒に奏楽せしむ今日の一行は実に思はざる天父の賜ものなりし

二十三日（火曜）昨夜は林檎を過食せし為に少しく不快今朝は六時に起褥其より聖書祈祷喫飯八時頃より共進会縦覧に出掛けたり九時入場十二時迠観たり北海道も斯くまで殖産の進歩したる事を大に感謝せり昨日より今日にかけて大に疲労せり午后は休眠せり今日中川嘉兵衛君より林檎を贈らる夜は書見をなし又沈思黙考せり

二十四日（水曜）昨夜は老莫水を飲みて休みし故に能く眠る事を得し今朝六時半起褥聖書祈祷喫飯其より散歩して大島正健氏の宅を訪ね幸ひ留岡幸助氏も来られ監獄の事出獄人保護の事札幌教会創立の事等を聞き大に益を得たり大島氏の宅にて昼餐の餐応に預かれり午后三時頃ウヰンビシュ氏を訪ねしも不在暫らく休息午后七時頃帰宿夜は入浴散歩せり

二十五日（木曜日）午前六時起褥出発の準備をなし八時迠に札幌停車場に行き八時七分発の汽車にて札幌を発し午后三時四十分室蘭駅に着し㊀旅籠屋に投宿す夜は早くより就褥

二十六日（金曜日）午前六時起褥聖書喫飯七時発の豊平丸に乗り込み午前十一時紋鼈に着す其より齋藤良知氏の宅に行き午后四時頃迠休眠其より北海孤児院に帰り夜は種々一行の談話をなせり

二十七日（土曜日）午前五時起褥北海孤児院毎朝役者の集りに於て献身と云ふ事につき勧めをなせり午前中は種々研究せり午后は休眠し又新聞雑誌を読み夜はベルナルド・ギルビンの談話をなせり

二十八日（日曜）今日は胃部不快昨夜咳嗽咯痰甚しくして不眠の為疲労終日安臥休眠せり今日東京小沢きく愛姉よりの書翰到着せり

は日本評論福音新報女学雑誌を読み大に益を得たり　○祈祷するもの、悔ゆべき罪（宣教師アーノルド氏）（一）自らを頼むこと可成早く之を捨つ可し神は我儕が力なり（二）臆病なる事是れ他の力を信ぜざる者の為す所神のかたわらに在る者何の恐る、所か之れあらん（三）不注意なること心の定まらざるは禍なり練習して心を一点に注ぐことを力めよ、口に発したる感情を叨りに棄つる勿れ（四）熱心を欠くこと心を熱くして祈れ熱の為には地球も鎔くべし右心何ぞ融解せざらん熱心ならん事を祈れ

※北海孤児院入院孤児姓名（以下九名の孤児の住所と孤児姓名の記載あるが略す）

右孤児院の為に働かるゝ人

（一）愛知県名古屋市出身　林竹太郎　三十四年
（二）〃　林クニ　三十三年
（三）長野県埴科郡西条村二百七十番地　村上恒三郎　三十九年
（四）北海道有珠郡東紋鼈村　鈴木雅彦　四十四年
（五）宮城県陸前国本吉郡入谷村　西城陸　三十年
（六）新潟県　堀川泰洋　二十九年
（七）宮城県　手代木熊次郎　二十三年
（八）京都　林正明　十九年

一〇

二十九日（月曜）今日は昨日よりの疲労にて終日家居して或は書見をなし或は沈思黙居して一日を送りし身体の容体は甚だ宜しかりし胃部も稍調ひし夜は紋鼈製糖会社長田村顕元君来訪せられ種々談話せり

三十日（火曜）今日は病気大に宜し午前七時起褥其より聖書祈祷書見をなし午后は書見をなし又書翰（札幌菅田勇太郎君中川嘉兵衛君）を認めし夜は談話をなし殊に理学博士伊藤圭介君の植物学に熱心なる事又身体の摂生に注意せらるゝ事を同君の孫中野功次郎君より聞き大に益を得し伊藤圭介君は始め活花を稽古するよりして植物の研究に至りしと云ふ全く独学なるよし六十歳のときまでは医者半分と植物研究半分なりしが六十歳より全く植物研究に身を委ねしと云ふ

三十一日（水曜）今日は午前五時頃起褥其より準備をなし林兄と共に馬車に乗り林正明君、手代木熊次郎君御者の役を取らる午前七時北海孤児院を出で長流村、有珠村、虻田村を経て洞爺湖畔に出でたり遂に孤児院開拓地なるニナルカの地に着し行々湖畔の景色を口実に愉快に感ぜり又向洞爺光橋旅籠屋に着し夜は早くより褥に就く今日は実に疲労せし他大に感ずる所ありし

九月一日（木曜）午前七時起褥其より光橋某氏と暫時談話し喫飯八時頃向洞爺を発し静かに馬を奔らせて午后六時北海孤児院に着す夜は早くより褥に就く今日三日月村沢見泰君よりの書翰着せり又札幌菅田勇太郎君への書翰を差出せり

九月二日（金曜）午前六時起褥昨夜は滋養香竄葡萄酒二十瓦程を飲みしに大に身体に快果を感じ苦痛を減じ咳嗽咯痰を減ぜし午前は齋藤鉄三郎氏来られ開墾上の談話をなせり又齋藤良知君小山内虔君来られ談話せり又龍野藩士大谷発君に書翰を発し明日午前

八時頃面会の約束をなせり又暁星園本郷定次郎君又東北学院押川方義君又仙台孤児院松田順平氏への書翰を認め又大須賀亮一、藤井米八郎、河合信水、小澤きく、博愛社、岡山孤児院の五通の端書、巌本善治兄への電報を認め差出せり

九月三日（土曜）午前六時起褥其より聖書祈祷又書見をなし十時頃大谷発氏来訪せられ故郷水害の事又北海道移住の事につき談話せり同氏は二十年以来北海道に住居せられ北海道の事情には甚だ明るき様なり午后は疲労の余休眠せり夜は暫らく談話し早くより就褥

四日（日曜）午前六時起褥聖書祈祷喫飯其より田村顕元君の宅に参り同君と共に二時間余社会改良の主義孤児教育の主義等を話したり其より会堂に集まり説教を聞き午后再たび田村氏の宅に行き大谷発氏と談話し四時頃帰院せり夜は鈴木ハル姉に忠告し又愛兄等に二宮尊徳氏の伝を話せり九時過褥に就く

五日（月曜）午前七時起褥午前中は書見をなし又北海道の事を研究せり午后は林竹太郎兄と北海孤児院の将来に付き又五百町の大地続開拓困難の事に就き話せり夜は其事に付き神に祈り熟考せり

六日（火曜）午前七時起褥するや東京心友巌本善治兄より電報為替来る直に林兄の尽力にて受取りたり午前は尚北海孤児院開拓の事に就き主に祈りて熟考せり兎も角も小さく手堅く確実に主の栄を顕す様にする事は主の聖旨に協ふ事を悟り林兄に之を告げ幸ひ齋藤良知氏来訪せられ之に話し二時半別を別げて西紋鼈船場迫馬車にて送られ三時頃膽振丸に乗込めり、四時頃汽笛一声西紋鼈を発し六時頃室蘭に着す是に於て晩餐を喫し八時該港を発せり余は遂に睡眠に就けり是の日陸軍屯田兵会計係佐野某に面会し屯田兵への事情を委しく聞けり又函館マッチ軸製造家某の話しを聞けり大に益を得たり

七日（水曜）本日午前七時頃函館に着し上旅籠屋に投宿す喫飯午前中は休眠せり午后は後志国に居らるゝ志方之善君への書翰及九州杉原廣井両姉への端書を認め差出せり又齋藤壬生雄君を訪ね北海孤児院の事に就き談話せり其より帰宿午后八時頃青森行の汽船青龍丸に乗り込めり節倹の為最下層（五十銭）に乗りしに遂に蒸し暑くして耐へ難かりし

八日（木曜）午前七時頃青森に着し中島屋に投宿せり朝飯を喫し暫時休息午前十時四十分発の東京行の汽車に乗込めり汽車中にて休眠し又書見して遂に夜に至る

九日（金曜）午后一時頃遂に東京に着せり其より女学雑誌社に行き暫時休眠湯谷瑳一郎君の来訪あり夜は藤井河合の両氏と談話せり

十日（土曜）午前は聖書祈祷喫飯博愛社震災孤児院北海孤児院阪本泰蔵氏への端書を認め差出せり其より神田三崎町杉山重義氏を訪ねて談話せり其より祈祷の為に上野に行きし雨の為に妨げられ上野ミシヨン二階を借用して祈祷せり感ずる所ありて林兄へ端書を認めて差出す夜は藤井兄と将来の事を談ぜり

十一日（日曜）午前七時起褥聖書祈祷喫飯九時頃より番町教会に集まる原田助兄の説教を聞けり又午前十一時より午后二時迄阪本泰蔵君と談話せり午后三時田中三郎兄を訪ぬ晩景迄談話せり夜は巌本善治と北海孤児院の事岡山孤児院の事博愛社将来の方針を談話せり又伝道上教育上の談話をもなせり

十二日（月曜）午前六時起褥其より喫飯今日午前中は二宮尊徳先生の言行録即ち報徳記を読み大に益する所ありし午后も亦然り今日は積日の疲労にて十分に休眠せり夜は十二時頃迄書見をなせし

十三日（火曜）今日午前六時起褥聖書祈祷喫飯八時頃より原田助君を訪ね談話せし大に愉快を感ぜし今日はトルストイ伯の小伝を読みて大に学ぶ所ありし又二宮尊徳先生の伝を研究せり今日は風

暴く吹き外出する事出来ざりし

十四日（水曜）今日午前六時起褥聖書祈祷喫飯八時より原田助君を訪ねて書籍を返却し其より植村正久君を訪ねて孤児教育上及び北海孤児院の将来に付談話せり又同君よりブース氏の英国の暗黒と云ふ書籍及びバーナード孤児院に関する書籍を寄付せらる其より丹羽清次郎君を訪ねしも不在其れより湯谷瑳一郎君を訪ねて将来の事及び伝道上の事教育上に事を談話せり同氏方にて昼飯を喫し其より築地小沢氏宅に至る午后五時頃迄談話し又石川政則君を訪ね又小沢氏宅に帰り岩瑳君に面会し又大須賀君と同車にて女学雑誌社に帰りつゝ談話す又巌本兄と暫らく談話し其より書籍を買ふ為に本郷に至る午后十時より藤井米八郎君及び河合信水君と共に談話せり又巌本君を共に別れの祈祷をなせり

十五日（木曜）午前四時起褥準備をなし五時女学雑誌社を発し新橋に行き小沢氏齋藤氏見送らる汽車中にて多く睡眠せり遠州浜松辺は暴風雨にて人家大に破壊するを見たり午后七時震災孤児院に着せり愛兒等に面会し役員方と談話せり

十六日（金曜）午前六時起褥喫飯をなし午前中は森君加藤君丹羽君等と談話し又午后は書見をなし且つ祈り夜は孤児等に北海道の産物を見せ談話をなせり又明日出発の準備をなせり

十七日（土曜）午前四時起褥喫飯人力車を雇ひ名古屋停車場に行き五時四十六分発の汽車に乗り込めり午后五時過ぎ那波駅に着す其より人力車を雇ふて鶴亀村に行き木村氏宅に荷物を預け歩行して西後明村坂下に至りしに疲労して進む能はず即ち人を雇ふて博愛社に報ず直ちに籠を以て迎ひに来らる十時頃博愛社に着す十二時頃迄談話せり無事に博愛社に帰りし事を主に感謝すアーメン